

学校教育目標	夢と希望と輝きをもつ 児童の育成	〔ミッション〕ふるさと原を誇りに思い、生き生きと輝いて21世紀の社会に貢献できるよう、自分で考え自分で行動する子どもを育てる。
		〔ビジョン〕・自由と規律のある学校 ・風通しのよい職場 ・地域を大事にする学校
経営目標に向かう ストーリー	☆七尾中校区、本校の研究テーマに共通している「自分の考えを持ち、説明する力の育成」に基づき、表現力の向上を目指した授業づくりを行う。 ☆行事等を通して地域の方々に親しみ、日頃のあいさつや会話等を通して感謝の気持ちを持つことにより、地域貢献への意識を涵養する。	

評価計画				昨年度末	目標値	第2回中間	第3回最終	達成度	評価
中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための 方策	評価指標						
①【学習指導】 主体的、意欲的に学ぶ児童を育成し、確かな学力を身につける	◎原小のスタイルを確立し、教師の授業力を向上させる	・国語科を中心に筋道を立てて考え、表現する力を高めるための課題発見解決学習を行う ・ユニバーサルデザインを取り入れた授業改善を進める	・市学力定着状況調査で正答率60%以上の児童の割合【市共通項目】 （4学年以外の児童も市学力定着状況調査と同様のテストを実施） ・「理由をつけて考えを表現することができている」児童評価【校区共通項目】 ・「ユニバーサルデザインを取り入れた授業改善に取り組んでいる」教師評価	—	70% *市66%	1月実施	国91% 算82% （4年） 国77% 算77% （4年以外）	A	A
				94%	90%	88%	87%	B	
				—	90%	100%	100%	A	
(修正)									
②【生徒指導】 自分を大切に、友達を大切に、共に頑張ろうとする心と根気強く取り組む力を育成する	◎児童の自己有用感を高める 【校区共通項目】 より一層健康意識を高め、望ましい生活習慣の定着を図る	・自他の良さを互いに認め合える活動の場づくりと評価の工夫を行う （「かがやきの木」の全校への紹介・表彰の場・縦割り班掃除等の取組） ・健康チャレンジの取組を継続し、日々の生活習慣について、目的意識をもたせ、個に応じた具体的な方法を指導する	・自分は、友達のよさやがんばっているところを伝えている。 児童評価【校区共通項目】 ・「よりよい学級学校にしようとしている」児童評価 ・規則正しい生活・食事・衛生についての保護者の肯定的評価 ・「身の回りの整理整頓に気を付けている」児童評価	92%	100%	92%	87%	B	B
				96%	98%	92%	92%	B	
				73%	75%	73%	81%	A	
(修正)				—	80%	77%	93%	A	
③【開かれた学校】 地域・保護者との連携を深め、信頼される学校づくりを進める	◎地域学校協働本部との連携を核として、児童と地域とのつながりが深まる教育活動を推進する 学校からの積極的な情報発信を行い、児童に関わる課題を保護者と共有し課題解決に努める	・地域と学校の協働により、児童の資質・能力・態度を育成する ・児童の学習面や生徒指導上の課題に対して、迅速に対応する	・「地域の人材とのつながりを広げたり、深めたりできた」教師評価 ・「学校は我が子の相談に丁寧に対応してくれる」保護者評価 ・「児童の課題に対し迅速に対応し、教職員間で連携して取り組んだ」教師評価	—	90%	63%	50%	C	B
				96%	90%	100%	100%	A	
				—	100%	100%	100%	A	
(修正)									

第1回関係者評価委員会

結果と課題の分析・改善方法等

① ・ユニバーサルデザインを取り入れた教室環境や授業改善への取組が意識化されてきた。特にICTの活用が進んだ。（電子黒板の昨年度年間稼働率47.7%→今年度8月末までの稼働率54.6%）配分された予算を算数のデジタル教科書の全学年分、導入に充てたことも一因として考えられる。ユニバーサルデザインの研修や情報交換を今後も継続して行い、児童の学びにつなげていく。 ・「理由をつけて考えを表現すること」については、目標値をわずかな	② ・コロナ禍での家庭生活の変化により、保護者が児童の生活実態を見る機会が増えたため、全体的に肯定的評価が下がっていると思われる。とりわけ、「チャレンジアウトメディア」の取組は、外出が難しい分、児童の目標自体も低く、達成率も低かった。今後は、学校で日々、短時間でできることを指導し、継続して意識づけていく（姿勢等）。「チャレンジアウトメディア」については、個人内で目標を高	③ ・「地域人材とのつながりの拡大と深化」については、コロナ禍の中で進めることができていない。この現状において、地域の方々と何ができるのか、どうすればできるのかについて今後の計画の練り直しが必要である。 ・保護者からの相談に対する職員の対応については高い評価を得た。今後も保護者の思いや願いに寄り添った丁寧な対応をしていくとともに、学校側からの発信も増やしていきたい。
---	--	---

がら下回っている。この原因は、コロナ禍においての学習形態として、1学期にペアやグループでの話し合い活動を控えていた影響が考えられる。2学期以降、徐々に話し合い活動を取り入れた学習を展開してきている。今後の授業において、「自分の考えを説明すること」をめあての中に明確に示すなどして、児童自身が「考えを表現すること」を意識できるようにして授業を展開していく。	めていくよう指導する。また、自分自身の生活リズムについて振り返る機会を設ける。 整理整頓については、下校前などを利用して、整理整頓する時間を確保する。学年実態に応じて、点検・評価を行う。「健康チャレンジ」に整理整頓の項目を取り入れ、家庭でも意識して取り組むことができるようにする。	児童の課題に対して、チームとして対応していくことができています。職員が孤立してしまうことや、誤った対応に陥ってしまうことを防ぐためにも、すぐに報告、すぐに相談できている現状を維持していく。そのことが職員一人一人の健康的な働き方につながり、児童の健全な成長につながる。
【全体】 ◆各家庭での「基本的生活習慣」の評価が低い、効果的な対処方法はないでしょうか。・家庭での習慣により学校生活に支障をきたしたり、集団への悪影響や本人の荒れがあったりするのなら、家庭との連携が必要になる。・本人との話し合いで改善が見られない場合、家庭との連携を進めたい。一緒に考えていく姿勢が、保護者の心を開く場合がある。支援の仕方を進める手立てが見えてくることもある。・保育園の場合、保護者と日々連携できるメリットとデメリットがある。ただ、言うタイミングは今なのかどうか、保護者と教諭の思いがずれ違わないよう、寄り寄せる必要がある。・保護者と先生との信頼関係で言えば、先生が保護者と話し合う以前に、子供が自宅で楽しそうに学校の様子を話せば、保護者も信頼してくる。信頼すると先生に言われたことに心を開く。先生の、その子を見る目が変わると、本人も変わる。周りの子供の接し方も変わる。よくしゃべるときは元気だと思うが、しゃべらないときは気になる。不安は態度に出ると思う。・そう言う意味では、1年単位で学級担任が代わるのは、いいのではないかな。専科教員が別の目で見るとも意義がある。小学校では、1年～6年までであるので、先生によって担当学年の向き不向きはある。参観させていただくと、高学年は自分の考えを出し合ういい授業をしていた。子供が変わってきている印象がある。・10人～20人規模の学級の授業はいいと思う。積み重ねると変わってくると思う。その一方で、学力格差も見えた。・昨年度、ご指摘いただいた「書く」活動を取り入れた学習は効果を生んできている。継続したい。・「書く」活動では、低学年には抵抗があると思うので、話し合いを中心に据える方がいいのではないかな。学年が上がるにつれ、恥ずかしさも増すので、先に書く活動を取り入れ、まとめておき、アウトプットできるとよいのではないかな。・アンケート結果を見ると、生活習慣でも児童と保護者の捉えに差があるのが気にはなる。例えば、中学校では家庭でのオンラインゲームが課題になっているが、小学校の実態はどうだろう。のめり込む状況が見えていないだろうか。・そういう児童もいるので、気がかりだ。そのため、昨年度、講師を招いて、PCTの講演会も開催してきた。・コミュニティのことというと、地域に関心をもつ児童が多いのは心強い。中高へのアプローチが不足気味なので、考えていきたい。・まちづくりチャレンジ事業を展開するので、中学校にも情報を提供し、中学生の力を借りたい。例えば、「どろんこバレー」だが、大人に混じって大会の手伝いをしてほしい。また、中学生チームを作って参加してほしい。・中学生も縦割り掃除や挨拶運動を通じて、変わってきつつある。物おじしない子に変わりつつあるように思う。・児童アンケートの取り方として、掃除や整理整頓の担当を決めて、付けさせてみると見え方も変わるのではないかな。		
【修正】	【修正】 ・チャレンジアウトメディア（タイムスケジュールをつくろう）、姿勢体操など、具体的な取組を入れる。	【修正】

第2回(中間)関係者評価委員会

結果と課題の分析・改善方法等

①・市学力定着状況調査結果：全学年の正答率60%以上の割合（国語80%、算数78%）であった。活用問題に限ると（国語60%、算数48%）となる。既習事項を使って、筋道を立てて考えるという力は、まだ不十分という結果となった。今後、主体的、意欲的に学ぶ児童を育成するために、授業づくりに関する情報共有の場を新たに設定（週に一回、金曜日の暮会時）し、授業力の向上を図る。 ・「理由をつけて話したり、書いたりしている」の児童評価が前期より下がった学年はあるが、指導者から見ると、「理由をつけて話したり、書いたりする」児童は、確実に増えている。児童自身が自分を厳しく客観的に評価できるようになってきていることで、肯定的評価が下がってきているのではないかな。今後も、「理由をつけて話す。理由をつけて書く」ことを日常の授業の中で定着させていくとともに、その都度の指導者側からの評価をすることを意識して授業に臨む。さらに、個への支援を工夫することが求められている。	②・自他の良さを認める取組を継続し、実態としてその効果も表れているが、アンケートで評価が低くなった児童も低学年に見られる。児童理解を今後も進めていく。 ・「規則正しい生活・食事・衛生についての保護者の肯定的評価」が高まっているが、身の回りの整理整頓に対する肯定的評価は38%と低い。今後は、学校での取組を家庭で活かすことができていくかの検証にしばらく、靴そろえと自分の持ち物の整理整頓ができていくかを評価してもらう形にしたい。 ・「アウトメディアデー」の取組に対する保護者の肯定的評価が高まった。しかし、チャレンジするレベルを3以上（1時間以内）に設定し、達成できた児童は半数以下である。今後は、レベル3以上の児童を表彰することも取り入れ、目標を上げるように方向づけていきたい。 ・姿勢に気を付ける意識が高まっている。今後は、「姿勢体操」が習慣化するように、取り組む時間（朝の会に組み込む等）を決めていく。	③・「地域の人材とのつながりを広げたり、深めたりできた」の教師評価は50%という低い評価となった。これは、今年度、地域の方々との直接的な関わりができなかったことによるものである。しかし、そのような状況の中でも、「3年生のお米カレンダー」「全校児童製作のしおり」「全校児童手書きの年賀状」等を地域の方々に届け、感謝の気持ちを伝える取組をすることができた。来年度も現在の状況が続くことが考えられるので、今年度の取組を継続するとともに、新たな取組を模索する。また、職員が地域の方に積極的に挨拶をすることや、児童に挨拶をすることの指導を続けることは、開かれた学校づくりにつながっていると捉えられるので、今後も継続していく。 ・保護者との対応については、前期と同様に高い評価を得た。気になることへの対応を「早めに」「学校側から」行うこと（電話・連絡帳・メ
--	---	--

・研究授業において、ユニバーサルデザインの視点を協議の中で取り上げてきた。来年度の研究授業においても、授業づくりの視点として、事前研修の段階から協議を進め、研究を推進する。

・「身の回りの整理整頓に気を付けている」児童評価が高くなっている。継続的に点検・評価を行い、整理整頓する時間を設けたことが、児童への意識づけに効果があったと思われる。

ール・直接対話）に努めた結果ではないかと捉えた。今後も継続する。
・児童の課題に対しての「チーム対応」は、今期も継続できている。来年度も同様の取組を行う。

【全体】自己肯定感をどう伸ばすか？・きちんとほめる、できていることをきちんと「できる」とほめることが大切では。子供は、道徳的な言葉をあまり知らないのでは？例）運動会の徒競走で転んだ。父は「転んだのに、よく粘り強く頑張った。」と。何かの言葉に換言することが必要ではないか。「自分のよさはどこ？」に、なぜ答えられないのか。⇒他者評価に取り組むこと。自分のことを周りはどう見ているのか。友達がどう評価してくれているのかを継続すること。（本校の「かがやきの木」はいい。）自己分析＞友達からの評価＞次にどうしたいのかのサイクルを取り入れることが大切ではないか。発達段階に応じて、どういう自己分析ができるのか、把握・見取りをしてほしい。保護者の言葉かけと教師の取組のマッチングも大事。学年によって、自己抑制力の強い学年があるが、教師の言葉かけを考えたい。／自己有用感？それとも自己肯定感を育てたい？／子供は深くは考えない。自分に欲求不満がないとか、満足度が高いとか…。どちらもあるのではないか。／本校は、少人数の強みを生かし、目が行き届いている。羨ましい。中学校でも、保護者はメディア（ゲームやテレビ等）に子育てを任せている実態がある。自分で時間を決めて、それを守る（止めるように自己コントロール）ことができるようになってほしい。しかし、なかなか止められず、難しい実態がある。小さなうちから、コントロールする力をつけてほしい。／グループでゲーム等をする場合は、簡単には止められない。学校でもコミュニケーションツールとなり、連携と排除（上手い下手）の対象となったりする。外国語を小学校からすることになり、好き嫌いや得手不得手の差が開く結果がある。中学校では3年間のトータルで、英語の方が国語より時間数が多い。／保育園としても、小さい頃からアウトメディアの習慣をつけてほしいと考えている。物が溢れている時代。ちゃんと座って食べる環境になっているのか。食べてくれさえすればいいと考えているのか。両親とも働くことが当たり前の時代。どういうふうに育てていくか、言うべきことは言わないと、と考えるが、価値観が多様化する中、難しい面もある。時間的な余裕がないと、子供にやらせ切らずに、手間がかかる・危険なことはカットするなど、大人がつい、手を出してしまう。時間的な余裕があるときには、どうするのがよいのか、信頼関係をつくり、苦言を言える関係をつくるのが大切だが…。保育園は、保育サービス（支援）という側面があり、言いづらいこともある。子供に危険を察知する力をつけさせたいが、信頼関係ができていないと、教師も止めておこうかと、躊躇することになる。例）かつては、1歳までにおむつを外す習慣づけ⇒今は、2～3歳まででできればと。／直接的に指導しにくければ、SNSやHP、学校便り等で発信することを考えてみるのもいいのではないかな。今の保護者は、間接的に言うと、納得しやすい一面があるのでは。スマホが当たり前の今の保護者世代では、アウトメディアの歯止めも、小さい頃から取り組む必要があるのでは。好き放題で見せていると、自制できないようになるのではないかな。／アンケートでは「学校は楽しい？」というのが一番知りたい。⇒いじめアンケートには、記載している。／中学校では、現在16名の不登校生徒がいる。通信制などの選択肢も広がっているが、校内でも居場所を何かつくろうとしている。／自己肯定感のことで言うと、自宅にいる時間が多くなり、叱ることが多くなった。地域に出向くことが少なく、ほめてもらう機会が少ない。この1年間、子供は叱られることが多かったかと反省している。家庭生活がベースなので、ほめる機会を増やしていきたい。妻は、最後までやらせ切らせたいと考えているが、つつい手出ししてしまうので気を付けたい。／いい雰囲気为学校なので、先生方もよさを発信できるようにしてほしい。地域コミュニティ・保護者とともに、新しい方々の誘致ができるように、発信につなげてほしい。

第3回(最終)関係者評価委員会

・協議会報告を受けて、各部会で、新たな改善点があれば、下にご記入ください。

学校関係者評価を受けての次年度の方針・方策

① ・「理由をつけて考え、表現する」ことだけに限らず、自己肯定感を高められるように、児童にわかりやすい言葉で評価する。そのことが、児童の行動に対する価値づけになり、学級全体にプラスの影響を与える。児童同士や指導者からの評価の時間を確保するためにも、毎時間の授業の振り返りを大切にする。	② ・「かがやきの木」の内容を朝会で紹介する。 ・褒め方・叱り方について、保護者に啓発したり、子どもに対する声かけの仕方を保護者どうしが具体的に交流できる場を設けたりする。(学級通信・懇談会など) ・「宿題ふりかえり週間」・「チャレンジアウトメディア」点検表を、保護者がねらいに合った感想が書けるような形式にする。	② ・学級通信等で担任の思いや願い等を発信していきたい。
【全 体】 ・振り返りについては、1 単位時間だけで評価できにくい場合もあるため、1 単元の中で振り返りの時間をじっくりと設定することも考えたい。 ・表現力や自己肯定感の育成に向け、いろいろな場面で、子供への評価を分かりやすく伝えることが必要である。 ・通信等で、今の課題や指導中のことなど、家庭への働きかけを担当のつぶやきとして、言葉を選びつつ取り入れていくといいのではないだろうか。		

第3回(最終)関係者評価委員会を受けて最終報告